

山と博物館

第23巻 第8号

1978年8月25日

大町山岳博物館



木 崎 湖

親子自然教室に望む

豊かな自然に恵れた信州で勉学しよう。とかの歌い文句でレジャーの波と共に、親子の自然教室、〇〇自然教室があちこちで沢山催されている。

自然に親み、自然の摂理を知り、自然の尊さを学び、健康な体力を作ることはこの上もない良い催である。また、安曇野のように、山高く、水清い自然の豊かな地はこの種の催に最適の場所であろう。

しかし、これらの催も内容を見ると、一部観光旅行者によってプラン化された大人のレジャーであって、内情は自然観察など一片の歌い文句にすら過ぎない。

先頃、この種の催に参加する機会があったので参加してみた。

参加者はファミリーの参加が主体であって、二才の小供から小・中学生、大人と層が広く実際の自然観察は何を主体に何処で行うのか計画を聞いてみても確なるものは何も持ってきていない。ただ、仁科三湖めぐり、次の日は山、とだけであって本当のねらいとする所が何なのかはつきりしたものがない。木崎湖の水泳場について、子供達はパンツ一枚で水遊びをするのを見て、リーダー格の一人いわく、「山の中だ、山の中だと聞いてきたのに、こんなきれいな水で泳ぐ場所があるなんて一言も聞かなかった。知ってたら海水パンツを一枚持って来てもっと子供達とたのしめたのと」、また昆虫あつめにあってトンボの捕え方も知らない指導員の引率であった。

本当の意味の親子自然観察会とはほど遠い焦点のない観光者のレールにのったレジャーそのもの以外何ものでもないことを感じ、今回、山博で結成された友の会が、早くこの種の催にも結合し、地域に根を下した活動ができることを痛感した。

(長沢修介)

利尻島の植物とその地史的分布 (1)

横内 斉

北海道本島の西北に礼文、利尻の姉妹島がある。利尻島はその形が大体円形で、那須火山系で海中から独立した火山島で、島の中心に利尻岳(一名利尻富士)一、七、一八がそびえている。礼文島は大体南北に細長く利尻島よりはるか古代に生成された丘陵性の低い山が連なり全島が奇岩奇勝に富んでいる。

礼文島の植物に就いては、本誌昨年(十一月、十二月)及び本年一月号の三回に亘って、陸上自衛隊礼文分隊司令小林悦郎氏と共著で発表した、その稿が成ってから小林氏から「松野力蔵」氏著「利尻・礼文両島の高山植物とその景観」なる一書と共に、利尻島に関する資料を興えられた。

松野氏の著書は、A5版を横型にしたもので、全巻カラーの豊かな印刷で、上段に高山植物の写真二葉を掲げ、下段に景観写真二葉を入れ、その対向面に前頁の解説をしているという親切なものである。

これにも増して私の目を引いたのは、巻末に添えられた両島の植物の目録である。これを見て私共の発表した礼文島に若干の手を加えなければならぬのを感じた。私は本年三月から著者と連絡をとり、前報の欠を補い、かつは利尻島の植物を説明、即ち地史的分布を明かにしようとして試みたのが本稿である。各種資料を惠興された小林悦郎氏と、惜しみなく利尻島の植物に関し教示された松野力蔵氏に深甚なる感謝の意を表す。

利尻とはアイヌ語の「リイシリ」からでたもので、「リイ」は高い山、「シイ」は島の意で、即ち高い山(利尻岳)のある島ということである。

島は行政上東側を東利尻町に、西側を利尻町に分ける。

人口のみをとって見ると、東利尻町は、もつとも多かったのは、昭和二十六年の一一、二八〇人で、昭和五十年には六、八八三人に減り、利尻町では昭和三十年には一〇、〇二五人だったのが昭和四十五年には七、五五三人となった。海産豊かなこの島にも過疎の波は押し寄せている。

両島のフロラは殆んど同一に近い、わずかに利尻にあつて礼文にないものに、イワヒゲ、クロマメノキ、コメバツガザクラ、イワウメ、ミネズオウと次で上げる利尻島特産植物のみである。利尻島特産植物には、リシリミミナグサ、リシリフシ、リシリオダマキ、リシリヒナゲシ、リシリウド、リシリゲンゲ、リシリアカバナ、リシリゼキシヨウ、リシリソウ、リシリオトギリの十種をかぞえる。

地史的分布概論

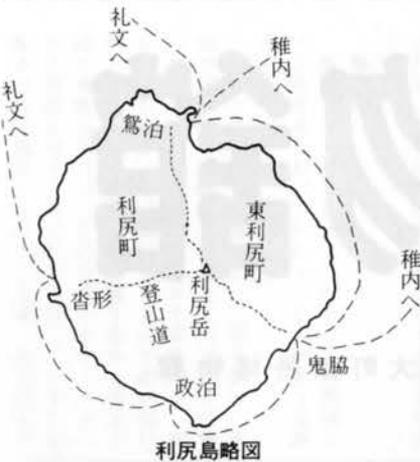
本論については、本誌「山と博物館」昭和五十二年十一月第二十二卷第十一号を参照せ

- られたい。以上の理由により省略。
分布型と地域分布系の略号
飛び越し型分布 略号(飛)
南まわり型分布 略号(南)
北まわり型分布 略号(北)
日本海めぐり型分布 略号(日)
大陸共通型分布 略号(大)
固有種 略号(固)
北マキネシア系 略号(北マ)
関東地域系分布 略号(関)
フオッサ・マグナ地域系分布 略号(フオ)
製速紀地域系分布 略号(製)
日本海(裏日本)地域系分布 略号(裏)
蝦夷陸奥地域系分布 略号(蝦)
無系統 略号(無)
史前帰化植物 略号(史帰)
帰化植物 略号(帰)
- 利尻島植物目録とその分布系**
- シダ植物
ハナヤスリ科 ヒメハナワラビ(大)、ヤマハナワラビ(大)、ハナヤスリ(南)
コケシノブ科 コケシノブ(北)
チャセンシダ科 トランオシダ(南)
ウラボシ科 クジヤクシダ(大)、メシダ(北マ)、ミヤマメシダ(北マ)、オオメシダ(北)、ミヤマヘビノネゴザ(北マ)、ヘビノネゴザ(北マ)、イワガネゼンマイ(南)、リシリシノブ(固)
- オシダ科 ミヤマシダ(北)、オシダ(北)、シラネワラビ(大)、ナガバシラネワラビ(無)、オオバシヨリマ(北)、ヒメシダ(大)、ミヤマワラビ(大)、ミヤマシケシダ(南)、コウヤワラビ(大)、コタニワタリ(大)、エゾデンダ(大)、ジュエウモンジシダ(日)、リシリデンダ(大)、イヌガンソク(大)、クサソツテツ(大)、ホソイノデ(大)、エゾイワデンダ(無)、ミヤマデンダ(無)、ミヤマノキシノブ(北マ)。
- ワラビ科 ワラビ(大)。

- ゼンマイ科 ゼンマイ(大)、ヤマドリゼンマイ(大)。
- トクサ科 スギナ(大)、キタスギナ(無)、トクサ(大)、オクエゾスギナ(大)、ミズスギナ(大)、エダウチスギナ(無)、ハマドクサ(大)、イヌスギナ(大)、ヒカゲノカズラ科 ヒメスギラン(南)、ヒカゲノカズラ(大)、エゾヒカゲノカズラ(無)、アスヒカズラ(大)、ウチワマンネンスギ(大)、タチマンネンスギ(大)、チシマスギラン(無)、ホソバトウゲシバ(大)、スギカズラ(大)、ヒロハノスギカズラ(大)。
- 顕花植物**
- 裸子植物
イチイ科 イチイ(固)。
- マツ科 アカトドマツ(北)、エゾマツ(北マ)、バンクミヤママツ(無)、ハイマツ(北)。
- ヒノキ科 ハイネズ(北マ)、リシリビヤクシシ(大)、ミヤマハイビヤクシシ(南)
- 被子植物**



礼文分とん地から 昭和52年5月



単子葉植物

ガマ科 ガマ(大)。
 ミクリ科 コミクリ(大)。
 アマモ科 スガモ(北)、オオアマモ(北)。
 ヒルムシロ科 センニンモ(日)、ナガガタ
 ヒロハノエビモ(無)、ナガバエビモ(大
)、シバナ(大)。
 タケ科 オオヤマザサ(無)、チシマザサ(北)、カラフトザサ(無)、エゾミヤマザサ(無)、オオネマガリ(無)、ウラゲカラフトザサ(無)。
 イネ科 アオカモジグサ(固)、カモジグサ(史前)、シバムギ(帰)、ヤマカモジグサ(南)、チシマヌカボ(北)、ミヤマヌカボ(南)、エゾヌカボ(大)、タカネヌカボ(無)、コヌカボ(史帰)、カズノコグサ(史帰)、ヤマアワ(大)、ホソヤマアワ(無)、ハコネガリヤス(無)、タカネノガリヤス(北)、ミヤマノガリヤス(大)、ホガエリガヤ(南)、ヒメノガリヤス(南)、イワノガリヤス(南)、カモガヤ(帰)、コメヌスキ(大)、ノビエ(帰)、ハママギ(日)、ハマニンニク(大)、ニワホコリ(史帰)、ヒロハウシノケグサ(帰)、ウシノケグサ(大)、オオウシノケグサ(帰)、コウボウ(大)、コメガヤ(固)、フサガヤ(大)、イブキヌカボ(大)、ススキ(南)、ムラサキススキ(無)、エゾススキ(無)、ミヤマハルガヤ(飛)、キダチネズミガヤ(襲)、ホソバクサヨシ(無)、オオアワガエリ(帰)、キタヨシ(大)、スズメノカタビラ(史帰)、ミゾイチゴツナギ(南)、カラフトイチゴツナギ(北)、タチイチゴツナギ(史帰)、チシマイチゴツナギ(無)、ヒメイチゴツナギ(無)、ナガハグサ(帰)、イチゴツナギ(日)、コドジョウツナギ(無)、エゾノドジョウツナギ(無)、ヒロハエノコ(無)、ムラサキエノコ(帰)、チシマ史帰)、リシリカニツリ(北マ)、チシマ

カニツリ(北)。

カヤツリグサ科 ヒラギスゲ(北)、シヨウジヨウスケ(固)、タカネシヨウジヨウスケ(無)、クロオスケ(大)、オニナルコスゲ(大)、ネムロスゲ(大)、コウボウムギ(日)、ヤラメスゲ(大)、チャシバスケ(大)、オニアゼスゲ(固)、ヒメスケ(北)、イトセキスゲ(飛)、カミミカワスケ(飛)、リシリスケ(北マ)、レプンスゲ(固)、オオカサスゲ(大)、ヒロムイスゲ(北)、オクノカサスゲ(北マ)、コウボウシバ(大)、カサスゲ(日)、マツマエスゲ(北)、ヤラメスゲ(大)、エゾノコウボウムギ(大)、エゾシバスケ(無)、ヒメシラスゲ(南)、コウボウスゲ(無)、ツルスゲ(北)、ヒメアオスケ(固)、ゴンゲンスゲ(北マ)、マシケスゲ(無)、キタアゼスゲ(北)、オオカワズスケ(大)、オノエスケ(北)、エゾマハリイ(無)、ワタスケ(大)、オオマハリイ(日)、フトイ(固)。
 サトイモ科 ショウブ(大)、ヒロハテンナンショウ(南)、カラフトテンナンショウ(無)、エゾテンナンショウ(無)、ミズバシヨウ(北)、ザゼンソウ(北)。
 ウキクサ科 コウキクサ(大)。
 ツクサ科 ツユクサ(史帰)。
 イグサ科 ヒメコウガイゼキショウ(大)、ドロイ(日)、エゾホソイ(大)、ヒメイ(無)、ハマイ(大)、スズメノヒエ(史帰)、タカネスズメノヒエ(北)、ヌカボシソウ(日)、クモマスズメノヒエ(大)、ミヤマスズメノヒエ(北マ)、チシマスズメノヒエ(北)、ヒメミヤマスズメノヒエ(無)、リシリイ(大)。
 ユリ科 エゾネギ(大)、ミヤマラッキョウ(北)、ギョウジャニンニク(大)、チシマラッキョウ(北)、キジカクシ(日)、オオウバユリ(北マ)、ツバメオモト(北)、キミカゲソウ(日)、クロユリ(大)、

チゴユリ(南)、シヨウジヨウバカマ(南)

、ヒメカンゾウ(北)、エゾカンゾウ(無)、タチギボウシ(北)、エゾスカシユリ(北)、オニユリ(南)、コオニユリ(南)、クルマユリ(北)、チシマアマナ(大)、ホソバクルマユリ(無)、ホソバアマナ(大)、マイルソウ(大)、オオマイルソウ(南)、ヒメイズイ(大)、オオアマドコロ(北マ)、ミヤマアマドコロ(無)、オオバタケシマラン(北)、ヒメタケシマラン(大)、クロミノイワゼキショウ(無)、チシマゼキショウ(大)、リシリゼキショウ(固)、エンレイソウ(北マ)、オオバナエンレイソウ(北)、リシリソウ(固)、バイケイソウ(北マ)、エゾバイケイソウ(北)、キバナアマナ(大)。
 アヤメ科 ノハナシヨウブ(日)、ヒオウギアヤメ(北)。
 ラン科 サイハイラン(大)、コイチヨウラン(北マ)、カラフトスズラン(無)、ホテイアツモリ(無)、レプンアツモリ(無)、オニヤガラ(南)、フタバラン(大)、ミヤマフタバラン(北)、ギボウシラン(固)、ノビネチドリ(北)、クモキリソウ(南)、ホザキイチヨウラン(大)、ハクサンチドリ(大)、シロバナハクサンチドリ(無)、オウヤマサギソウ(北マ)、ミヤケラン(無)、ネジバナ(大)、チシマアオチドリ(無)、キソチドリ(固)。
 離弁花植物
 ドクダミ科 ドクダミ(大)。
 センリョウ科 ヒトリシズカ(南)、フタリシズカ(南)。
 ヤナギ科 ウラジロヤナギ(帰)、アマリカヤナギ(帰)、ドロヤナギ(北)、エゾノタカネヤナギ(無)、イヌマルバヤナギ(固)、シダレヤナギ(帰)、カワヤナギ(固)、エゾノミヤマヤナギ(無)、マルバノバコヤナギ(無)、エゾノバコ

コヤナギ(固)、カラフトヤナギ(無)

、ミネヤナギ(北マ)、オノエヤナギ(北)、キツネヤナギ(北マ)、ミヤマキツネヤナギ(無)。
 クルミ科 カラフトオニグルミ(無)。
 カバノキ科 ミヤマハンノキ(北)、ケヤマハンノキ(固)、ヤチハンノキ(無)、ナガミダケカンバ(無)、ダケカンバ(北)、コバノダケカンバ(無)、カラフトダケカンバ(無)。
 ブナ科 ミズナラ(北マ)、モンゴリナラ(大)、カラフトガシワ(無)。
 ニレ科 ハルニレ(日)、コフニレ(日)、オヒヨウニレ(日)。
 クワ科 ヤマグワ(北)、ハマグワ(無)、カフトグワ(無)。
 アサ科 カラハナソウ(北)、アサ(帰)。
 イラクサ科 コバノイラクサ(南)、エゾイラクサ(北)。
 ビヤクダン科 ナガバカナビキソウ(無)。
 タデ科 ソバカズラ(帰)、ツルタデ(帰)、イブキトラノオ(大)、ムカゴトラノオ(大)、アミメイブキトラノオ(無)、マルバギシギシ(飛)、イヌタデ(史帰)、ヤナギタデ(史帰)、タニソバ(大)、ママコノシリヌグイ(南)、オオイヌタデ(史帰)、オオミソソバ(無)、シロイヌタデ(史帰)、エゾノミズタデ(飛)、ウラジロサナエタデ(史帰)、イシミカワ(史帰)、ミソソバ(日)、ウラジロイタドリ(無)、ニワヤナギ(史帰)、オオミチヤナギ(帰)、オオイトドリ(北マ)、ヒメスイバ(帰)、ノダイオウ(大)、タカネスイバ(大)、エゾノギシギシ(帰)、ナガバギシギシ(帰)、ホソバオシタデ(無)。
 アカサ科 ホソバノハマアカサ(大)、アカサ(帰)、コアカサ(史帰)、ウラジロアカサ(帰)、オウビシギ(日)、ホウキギ(帰)。
 (東筑摩郡四賀村)

安曇の民話 (3)

長 沢 武

合戦沢

有明山の麓に合戦沢という沢がある。桓武天皇の頃だった。有明山には魏石鬼八面大王という鬼の一族が住んでいて、神社をこわしたり民家を焼いたり人をさらったりの乱暴久しく、人々はほとほと困りはてていた。

このことが都へ聞こえ、延暦二十四年、ついに天皇は坂上田村麿將軍に鬼族退治の命令を出したという。

將軍は川会で軍を揃え、矢沢の奥まで攻め入ったが、鬼族との戦いの激しかったのは今に伝わる合戦沢のあたりで、鬼共は石を投げつけ岩を落し、坂上將軍もほとほと苦戦した。

そこで將軍は、日頃信仰している千手薩陀觀音に祈願すると、「山鳥の尾の長いもので矢を作り射るとよい」というお告げがあり、それを得てようやく魏石鬼を退治することができたという。

今も宮城の近くには鬼共が棲んでいたという岩屋があるし、鬼共の耳を切って埋めた所は耳塚、長い尾の山鳥を得た所を長尾と呼んでいる。

御殿場

梅池スキー場や白馬大雪溪の下に御殿場という所があるが、これについて次のような話がある。

昔はこの家でも馬を二―三頭も飼い、水田や畑の肥料の厩肥を作ったもので、その為にとこの村も奥山まで出掛けて草を刈り、薪を得たものだった。松川をはきんで南の細野村と北の新田と塩島村は、鎌ヶ岳から梅池を経て乗鞍岳にかけ、その所有をめぐって争いが九年間も続き、享保七年にはついにそのお裁きの為に幕府から役人が出張、見分けをす

ることとなった。そこで松本の殿様から登山道の伐り払いや道作りの人足割当命令が、四ヶ庄十三ヶ村の村に出た。こうして延一、二〇〇人の人足が強制的にかり出され、乗鞍岳までの道が作られたが、お役人は今の御殿場まで登り、こゝで事情聴取と見分けを行い結論を出した。この事件は山の中の小さな村を騒がせた大事件だった。

三吉小屋場

黒部の谷は加賀藩の領分である。しかし越中の村からは遠く隔れた所であるので、国境警備の目がなかくとどかない所だった。ところが隣の信州からは一つ山を越せばすぐであるので、昔から魚釣りやカモシカ獲りや盗役に出征する者があった。

安永四年の夏のことだった。今の鳥帽子岳の谷で大盗伐があるという情報が加賀藩に入った。藩では早速レンジャー部隊を編成、剣岳の大窓を越して現場へ急行した。だが、手知ったる十八人の盗賊は既に逃けた後で、もたもたしていた一人の男を逮捕、加賀へ連行し油をしぼると、この男は三吉という大町組の高根新田村の者であることが解った。

加賀藩では早速役人を廻し、野口村の山元締九郎七や高根の庄屋半兵衛などに詰問するが、どちらもものりくらりの答弁でちががかず、ついに結論がでないまま、一年間もすつたもんだのおとがめがあった。そんなことで盗伐小屋のあった所はその後三吉小屋場と呼ばれるようになった。

笠の下はお前にくれる

「佐野坂は北と南の分水嶺」と唄われているが、大町市と白馬村の行政界も大尾根境となつて線が引かれている。ところが昔は佐

野村(現白馬村佐野区)が今の青木湖スキー場の近くまで支配していたようで、今もそこまで土地は皆佐野の人の所有であり、文政十二年に佐野村の庄屋が建てた三十三体観音の石仏も大半が大町地籍となつていて最後の三十三番観音も青木湖スキー場の近くに祠られているが、この奇怪な現象について次のような話が語り継がれている。

昔から青木湖からは立派な赤魚(ウグイ)が捕れ、この湖は青木村の西沢家の支配するところ、西沢家では毎年赤魚を松本の殿様に献上する習しがあった。ある年、殿様が一日青木湖畔のまびすま原に蕨狩りに来た時、案内した西沢家の主人に「そちの古くからの忠勤嬉しく思うぞ、今日は何なりと申すがよい、望みのものを褒美にとらすゾ」と言ったが、主人が恐縮していると殿は、「ソーダナ、土地が一番よからう、此の笠の下に見える所全部をそちにやろう」と、腰を下して休んでいる笠に小手をかざして言ったという。

そのため、その後、前からの所有者の佐野村と、青木村との間にこの土地の所有をめぐり争いが起り長く続いたのであった。で、行政界は殿様の言った線と、所有界は昔のままということになったのだと。

雪倉銀山道

雪倉岳には良質の銀の鉱脈があり、戦国の世から明治の晩年までの三〇〇年もの長い間掘り継がれた歴史があり、山の中の各所に往時を偲ばせる地名が残っている。

蓮華温泉への途中にある「カゴ落し」という所は、昔高田藩の役人が、銀山の採鉱状況を見に山カゴに乗ってやって来たが、こゝは名にし背う峻しい山路で、木の根や岩石が多く、カゴをかき人足が木の根に足をつまずかせ、カゴを谷底へはっばり落し、乗っていたお役人が大変な目に逢うというハブニングの起つた所で、今でも話の種になつている。

また「燈籠松」という所は、雪倉銀山は雪深い深山であるので、夏から秋の四ヶ月しか

採鉱することができない。そこでこの間は昼夜兼行で採鉱に努めたもので、夜は悪場の目に燈籠をつけておいた。その燈籠を下げておいた見晴しの良い尾根の一角の一本松は、今でも燈籠松と呼んでいる。

明治になつてからは高田の殿様神原家が自らこの銀山の経営に当り、兵馬の平には立派な御殿や大きな門柱が建てられていた。広大な湿原とその端の丘には、今でもその屋敷や用水跡や、朽ちはたてた門柱を見ることができらる。

大所

大所は、姫川溪谷から大所川に沿つて四キロ近くも奥へ入つた山の中の小さな部落である。今は蓮華温泉への車道が完成、知らぬ間に過ぎてしまふが、こゝはその昔「御殿」と書き、山岸豊後守が住んでいた所だ。

山岸豊後守は小谷五人衆の一人で、室町時代からの豪族だったが、川中島の合戦の頃の弘治三年、平倉城が武田信玄の武將山縣昌景によつて落とされた時から一人上杉方につき、こゝに移り住んだという。彼は雪倉銀山の所有をめぐり信州人と争い、江戸へ上ること九十九回、百回目について毒殺されたといわれるが、今姫川温泉は長野県領であるのに橋を渡つて大所川から上流は全て越後領であるのは彼のお蔭によるものだと今も語りつがれている。

博物館だより

ライチヨウ寄付金

一一〇〇円 千葉県成田市加良部二一―

一 今枝 知殿

山と博物館第23巻第8号

発行所 長野県大町市TEL0261-211

印刷所 大町市依町 大町山岳博物館

定価 八〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号(長野)三三、二九三